http://www.music-communication.com

神戸女学院大学

TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2021年度 活動報告書

このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。

音大連携による教育イノベーション：音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2021 年度　活動報告書

目　次

はじめに …… 2

教員・スタッフ紹介・2021 年度活動概要 …… 3

2021 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

1．第 1 回　コロナ禍の丸一年から生まれた新機軸～不要不急でない舞台芸術～ …… 4

2．第 2 回　音楽ビジネスの現状と今後～渦中に見える音楽の絆～ …… 6

3．第 3 回　ようこそ先輩シリーズ①：
今に繋がる学生の頃の気づき～卒業から歌う 3 児の母になった現在まで～ …… 8

4．第 4 回　コードを使って曲を弾こう～ポップスやジャズの演奏法から学べること～ …… 10

5．第 5 回　コロナ禍における公立ホールの挑戦 …… 12

6．第 6 回　危機の時代と芸術 …… 14

7．第 7 回　音楽家のためのコーチング～より良き指導者になるために～ …… 16

8．第 8 回　ようこそ先輩シリーズ②：
音楽家を目指す大学生が卒業までに知っておくと得する 7 つの秘訣 …… 18

9．第 9 回　カラダを奏でる非言語の身体コミュニケーション ～ 動きと音は双子のきょうだい !?～ …… 20

10. 第 10 回　ようこそ先輩シリーズ③：音楽作りワークショップを学ぶ …… 22

11. 第 11 回　ようこそ先輩シリーズ④：音楽作りワークショップを学ぶ …… 24

12. 第 12 回　学校で教えてくれない音楽：導入編 …… 26

13. 第 13 回　即興はこわくない！
～色々な音楽的手法と自由なアイディアで、モチーフを膨らませてみよう～ …… 27

14. 第 14 回　学校で教えてくれない音楽 …… 29

15. 第 15 回　総括 …… 31

おわりに …… 32

はじめに

共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も 13 年目を終えようとしております。新型コロナウイルスの猛威に悩まされてすでに 2 年、今年度も国外からの講師招聘はかなわず、授業形態も引き続きオンラインが中心となりました。状況に応じて対面授業が成立した場合であっても、十分なディスタンスを取り感染防止を優先するため、コミュニケーションの取りづらさという難題を常に抱えての授業運営となりました。

本講座は昨年度に引き続き、こうした状況が引き起こす「分断」やコンサート活動の危機を知った上で、我々が音楽を通じて何ができるのかということを、多様な分野の講師陣とともに考え、また実践を通して感じる機会としました。同じ空間で同じ空気の振動を共有し、同じ響きを聴き合う場が成立しにくくなった中で、オンラインを通して人がつながり、気持ちを共有することの工夫が進んでいます。でもその一方で、リアルなコミュニケーションの場が益々大切であることに気づき、学生たちは、音を通して心をやわらげ一体感を感じるための多様な方法、そしてその基となる柔軟な考え方の必要性を学びました。

今年度も、さまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。1 年間の活動内容をまとめた本報告書を、音楽・芸術・教育に関わる方々に広くご高覧いただき、未来に向けてのご助言をいただけましたらありがたく存じます。

2022（令和 4）年 3 月

武石みどり（東京音楽大学音楽学部・教授）

＊開講科目名
ミュージック・コミュニケーション講座 A・B（東京音楽大学）
ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

教員・スタッフ（令和４年３月現在）

東京音楽大学	武石 みどり	東京音楽大学音楽学部	教授
	赤木 舞		非常勤講師
	磯野 恵美		連携センタースタッフ
	坂本 夏樹		連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実	神戸女学院大学音楽学部	教授
	荒木 この美		連携ルームスタッフ
	小林 瑠那		連携ルームスタッフ

令和３年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

今年度の全体テーマ「分断の時代を音楽で乗り越えるには（パート２）」

オリエンテーション：令和３年４月16日（金）Zoomにて２大学を中継	発信校：東京音楽大学
第１回：令和３年４月30日（金）Zoomにて２大学間を中継	発信校：神戸女学院大学
第２回：令和３年５月14日（金）Zoomにて２大学間を中継	発信校：神戸女学院大学
第３回：令和３年５月21日（金）対面で実施	神戸女学院大学のみ
第４回：令和３年６月４日（金）対面とZoomのハイブリッド形式	発信校：東京音楽大学
第５回：令和３年６月11日（金）Zoomにて２大学間を中継	発信校：神戸女学院大学
第６回：令和３年６月25日（金）Zoomにて２大学間を中継	発信校：神戸女学院大学
第７回：令和３年７月９日（金）Zoomにて２大学間を中継	発信校：神戸女学院大学
第８回：令和３年７月16日（金）対面で実施	神戸女学院大学のみ
第９回：令和３年９月24日（金）Zoomにて２大学間を中継	発信校：東京音楽大学
第10回：令和３年10月１日（金）対面で実施	神戸女学院大学のみ
第11回：令和３年10月８日（金）対面で実施	神戸女学院のみ
第12回：令和３年10月８日（金）対面とZoomのハイブリッド形式	東京音楽大学のみ
第13回：令和３年10月22日（金）対面とZoomのハイブリッド形式	発信校：東京音楽大学
第14回：令和３年11月12日（金）対面とZoomのハイブリッド形式	発信校：東京音楽大学
第15回：令和４年１月14日（金）対面とZoomのハイブリッド形式	発信校：東京音楽大学

2021年度　第1回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第1回ミュージック・コミュニケーション講座 「コロナ禍の丸一年から生まれた新機軸～不要不急でない舞台芸術～」
講　師	西濱 秀樹（山形交響楽団協会専務理事兼事務局長）
実施日時	2021年4月30日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	Zoomにて配信（神戸女学院大学発信）
講座の概要	第1回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、山形交響楽団協会専務理事兼事務局長の西濱秀樹氏を講師に迎えて、神戸女学院から発信した。 西濱氏は関西学院大学社会学部を卒業し、1995年、オーケストラの存続を訴えるシンポジウムでの発言をきっかけに関西フィルハーモニー管弦楽団に入社。2003年から2011年まで理事･事務局長を務め､楽団の法人化と黒字化を達成した。2015年5月に山形交響楽団協会専務理事兼事務局長に就任。2018年6月より日本オーケストラ連盟専務理事を兼務。2011年8月から教育事業に携わり､コンサートでの司会を16年間で2000回も務めた実績を持つ。 西濱氏の話は現状分析から始まった。コロナ禍で各オーケストラは巨大なダメージを被った。山形交響楽団も同様で、去年は多くの演奏会が中止になった。山形交響楽団のポリシーは、子どもたちに「音楽を届けたい」ということ。コロナの影響は今も続き､コンサートが次々と中止になって､大きなダメージを受けている。 コロナ禍で最も重視したのは組織運営であった。去年4月に緊急事態宣言となり、そこから3か月間は完全に活動のない状態だった。その期間に行ったのは対話をすることで、楽団員全員を集めて、これからの経営や見込まれる損失、打つべき対処等を説明した。この対話で大事なのは、危機的状況に当たって経営責任者が現状を説明することだと語った。 2020年6月13日に無観客コンサートのライブ配信を行って､活動を再開した。NHKのプロジェクト「希望のシンフォニー」では、全国のオーケストラを集めて演奏するなど、様々な事業を行って活動したことで、去年の1年間を乗り越られたと言う。 ターニングポイントになったのは去年の7月だ。クラシックマネジメント協会が感染症対策検証結果を発表し、これに基づいて観客を入れてコンサートを開催することができた。開催に際してはしっかりとした感染対策を行ったとも話した。2021年3月14日に無観客ライブ配信を行った際には、約30万人が視聴したが、お客様をホールに迎え入れることができないことに何度も悔しさを感じた。それでも2020年から言い続けてきたように､「歩みを止めない」ために、3月のライブ配信をきっかけに山形交響楽団を世界に広げようと努力した。 オーケストラが何のためになるかを考えた時、オーケストラの活動が豊かになることで、いかに社会を活性化させることができるかが重要だとし、コロナ禍で新たな挑戦を行った。それは、芸術団体として山形交響楽団から地域と世界を結んでいくようなHubをめざすという、新たなビジョンを組むことだった。 コロナ禍でのコンサート開催は無観客を余儀なくされたが、舞台芸術はお客様がいてこそ成り立つものだと葛藤した。去年7月にようやく観客を入れてコンサート開催ができた時の喜びは今でもはっきり覚えている。楽団のメンバー全員が感動した。芸術家が活発に活動し、それによって地域が活性化するというモデルを

	作ることが重要だという思いをより強く持ったと語った。 　最後に、「コロナ禍でも負けない。不要不急と言われようが、社会にアピールしながらその存在を明確にしていく必要がある」と熱く述べた。

〈学生のことば〉

・「あなたたちは不要不急であると言われても、諦めず、価値を明確にしていくことが大事」という言葉に胸が一杯になりました。新聞やテレビなどでコロナウイルスにより思い通りの活動ができない、というニュースを毎日のように耳にしますが、そのほとんどは学生や部活動のこと、企業のこと、スポーツの大会やオリンピックのことであって、音楽家の活動が取り上げられることは極めて少ないように感じていました。音楽に携わる仕事や音楽そのものが必要のないものと思われているのだという悲しい気持ちがありましたが、今回先生のお話を聞き、勇気を頂きました。先生がおっしゃっていたように、この今の世界を豊かにするものこそ音楽だと思います。私もこの状況に負けず、先生や山形交響楽団の方々のように音楽に向き合い続けたいです。　（神戸 / ピアノ /1 年）

・司会がお客様や演奏家を繋ぐ、繋ぎ手としての重要な役割を担っていることを理解することができました。音楽はただ演奏を聴かせるだけでなく、子どもの共通の話題になったり、共通言語としても文化としても生きていることを改めて実感できました。コロナ禍で約半分の公演を失い、とんでもない損害を出しながらも、倒産せずに乗り越えている楽団だからこその強みがたくさんあるのではないかと思いました。芸術には、資金等の基盤を作り、それを所属メンバーに伝えることによって、お金に対する不安がなくなって良い演奏ができるといったように、お金との関係は切ることができないと感じました。リモート演奏会等の活動を最近よく見るし、リモートならではのものもあるのではないかと利点を探していたのですが、お話にもあったように、無観客と有観客には全くの違いがあると思いました。　（神戸 / 声楽 /2 年）

・今回のお話を聞いて、現代日本における交響楽団という組織のあり方が難しくなっているように思いました。現在の日本には芸術音楽と商業音楽の二種類の音楽があり、交響楽団は主にクラシックという芸術音楽を中心に演奏しながら、それによって収入を得なければいけないという商業的一面を持っています。欧米のように宗教上にオーケストラが必要な国、映画産業が栄えている国では、楽団に演奏会以外の収入源があるため比較的安定した経営ができるように思えます。海外の演奏者たちはパートタイム・ミュージシャンであることが多く、楽団の責任も軽そうに見えます。では、この音楽的土壌が緩い日本という国で芸術と商業の狭間にある交響楽団がどのように生き残っていくか。楽団に必要なのが卓越した技術を持つ演奏者だけではなく、西濱さんのような策士のアートマネージャーでもあると感じました。　（東京 / 作曲 /3 年）

・西濱先生の講義を拝聴し、今のこのコロナ禍での音楽業界が想像以上のダメージを受けていることに驚愕した。メディアでも度々音楽やイベント業界がコロナ禍で多大なダメージを受けていることは報道されていたので、苦労していることは知っていたが、西濱先生が具体的な数字を仰って下さったことで、より現実的に音楽業界のダメージを理解することができた。その中でも何かしようと企画を立てたりしている姿に感銘を受けた。近頃、クラシック業界に限らず、アーティストの多くはオンライン・ライブを開催している。そのためには回線や機材など相当な準備があり、私も一度好きなアーティストのオンライン・ライブを見たことがあるが、時差なくきれいな画質で見せるためには膨大な費用がかかることを後々知った。オーケストラの団員はその仕事で生計を立てている人が多い。その中で演奏ができないという苦しみを、西濱先生のお話を聞いて益々実感した。
（東京 /MLA/1 年）

※写真は Zoom 配信による講座の様子です。

2021年度　第2回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第2回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽ビジネスの現状と今後～渦中に見える音楽の絆～」
講　師	稲本 渡（クラリネット奏者、神戸女学院大学音楽学部講師）
実施日時	2021年5月14日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	Zoomにて配信（神戸女学院大学発信）
講座の概要	第2回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、クラリネット奏者で本学専任講師の稲本渡氏を迎えて、神戸女学院から発信した。 稲本氏は大阪府立淀川工業高校吹奏楽部を卒業後、オーストリア国立グラーツ音楽大学を満場一致の最優秀で卒業し、2008~2011年に兵庫芸術文化センター管弦楽団で活躍した。京都御苑で奉仕演奏をする傍ら、ビルボードライブや演劇にも出演し、映画では音楽家役で出演するなど多方面で活躍している。音楽と地域資源とのコラボレーション事業を展開し、東京と大阪でオーケストラをプロデュースして様々なジャンルの全国ツアーを行っている。2017年から堺親善アーティストを務める。 オーケストラのプロデュースでは、話題性や集客力と、公演費用や広告宣伝等とのバランスが重要である。全国ツアーを組む場合、商業音楽を使うことで需要を喚起し、ビジネスとしてコンサートが成り立つように企画する。東京と大阪にそれぞれオーケストラを配置し、16、7人程度の小編成とすることで出演料や宿泊費を抑え、主催者やホールが購入しやすいように工夫する。首都圏では自主公演にし、地方へはパッケージとして販売するが、自主公演は広告宣伝のためであり、音楽ビジネスを行う中ではいかに多くの人に知ってもらえるかという部分にお金をかけなければならないからだと語った。広告宣伝という面では、高額な広告費を投入して新聞広告や深夜にテレビCMを打ったりする。ホールのキャパシティ×チケット代よりも高い広告費をかけるのは、全国のホール関係者などへの宣伝になるだけでなく、音楽を聴きに来る人は受け身であることが多く、自らコンサートを探すよりも何となく目にしたもののほうが興味を惹く傾向にあるからだそうだ。 こうした音楽ビジネスのノウハウを生かしながら、近年では「ジブリの思い出がいっぱい」「ブランニュー・ミュージカル・コンサート」などの人気公演を行っている。「ジブリの思い出がいっぱい」は、2017年から年間30公演ほどのツアーを組んでおり、公演のナビゲーターをジブリの声優が務めるため、集客がしやすい。ジブリ公演は地方で人気なので地方公演に力を入れている。一方、「ブランニュー・ミュージカル・コンサート」は都市部に多いミュージカル・ファンをターゲットに、2019年から年間3・4公演を行っている。ミュージカル俳優とのコラボレーションやハイライトの実施でファンを魅了するため、チケットがあっという間に売れるという。 講義終盤ではコロナ禍での音楽ビジネス事情という話題になった。稲本氏が以前に代表取締役を務めていた(株)音屋組では、緊急事態宣言期間中、最大96%も売上が減少した。最近ではホールや主催者側からのキャンセル料すら支払われず、仮に席数50%上限で開催したとしても費用だけがかかってしまう状況に陥った。 そこで、コロナ禍ならではの仕事に目を向け、関西の人気ラジオ番組で9人の音楽家が各々「六甲おろし」を演奏するという企画を行った。これが人気を博

講座の概要	したため、ラジオのリスナー向けにコンサートを開催し、ライブ配信も行った。現在はライブ配信など、オンラインで音楽を気軽に聴くことができる便利なツールが存在する反面、生演奏にこだわる人も少なくない。特に子どもを持つ親には、子どもの今の年齢で生の演奏を聴かせたいという声が多いと語る。 　コロナ禍であっても、そうでなくとも音楽ビジネスというものはコンサートの目的や集客、宣伝等で様々な工夫を凝らす必要があり、少しでも多くの音楽ファンを獲得するためにはコンサートそのものに付加価値をつけることが重要だと述べた。 　音楽ファンの内、クラシックのファンは 10% 程度であるため、そこを音楽家同士で取り合うよりも､残りの 90% に目を向ける必要性があると講義を締めくくった。

〈学生のことば〉

・１つのコンサートをするためにたくさんの問題や課題をクリアして演奏者の方は舞台に立たれているのだ、ということをとても強く感じました。また、これまで何気なく舞台に足を運んでいましたが、あれらの舞台は多くの人の努力の結果、ようやく出来上がった舞台であり、それを観られるということは本当に素晴らしいことだと改めて気づくことができました。音楽ファンのうちクラシックファンはたった 10%、コンサートに来てもらうためにはその少ないクラシックファンをターゲットにするのではなく、残りの 90％の人に目を向けてもらえる努力をする、ということもとても心に残りました。そのために自分がよく行くカフェなどにチラシを置いてもらう（そのチラシにお店のクーポンを付ける)、子供は入場無料の公演のチラシを保育園で配ってもらう、市役所の記者クラブで宣伝をするなど具体的に何をするべきなのかも学ぶことができて大変勉強になりました。
（神戸 / ピアノ / １年）

・演奏だけでなく、地元で音楽を盛り上げる活動を主体的にされていて、とても感銘を受けました。一番印象に残っているのが地元の特産品とコラボレーションした演奏会です。演奏会というものに敷居の高さを感じている方でも気軽に来られる企画というのが、新たな顧客層を獲得することにつながるのだと思いました。
（神戸 / ヴァイオリン / ３年）

・貴重なお話、とても印象的でした。私も将来実際にエンターテイメントとしての音楽を通して、より多くの人に音楽を知ってもらいたいと思っているので、今日はとても現実的なお話を聞く事ができてとても勉強になりました。実際にビジネスとして会社を始めてしまうガッツはすごいと思いました。
（東京 /MLA/ ３年）

・広告費の具体的な金額を聞くと、テレビ番組の製作などが広告収入でやっていける理由がよく分かると同時に、金額のかかる広告の影響力がどれだけ強いのかもよく分かると思った。お客さんを呼べるのはやはり凄く強い。だからこそネームバリューが無いと何もできない…逆に言えば、ファンを獲得することさえできれば何でもできる、とも言えると思った。
（東京 / ピアノ / ３年）

・今回は実際に音楽活動をされている方の講座ということで自分にも当てはめて聞くことができました。特にラジオ局への持ち込み企画のお話からは企画力や良さを伝えるプレゼンテーション能力も演奏面以外に求められるなと感じ、視野を広げようと思いました。また、広告費や会場費など現実に不可避なコストについて、資金不足の際にどう抑えて活動していくのかなどを考える上で、具体的な数字が出てきたので参考になりました。音大では基本的には音楽のことしか教えて頂けないからこそ、自分から学ぶことやチャレンジすることが大切なのだとこれまでの授業を通して感じたので、積極的に学びたいと思います。
（東京 / 弦楽器 / ４年）

※写真は Zoom 配信による講座の様子です。

2021年度　第3回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第3回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ①： 今に繋がる学生の頃の気づき～卒業から歌う3児の母になった現在まで～」
講　師	谷田 奈央（声楽家、神戸女学院大学音楽学部卒業生）
実施日時	2021年5月21日（金）14：00 ～ 15：30
実施場所	Zoomにて配信（神戸女学院大学発信）
講座の概要	第3回の「ミュージック･コミュニケーション講座」は､｢ようこそ先輩シリーズ」の第1回で、神戸女学院大学のみの講義として、声楽の谷田奈央氏（M124回生）を講師に迎えた。 谷田氏は本学音楽学部と同大学院音楽研究科を修了し、オペラ公演や第九、メサイアなどのソリストとしても活躍する傍ら、演奏グループ「アンサンブルちょうちょ」を立ち上げ、これまでに300回近くの子どものためのコンサートを展開している。 座右の銘は「迷ったらやる !」。卒業後の進路において､いつでもこの言葉をモットーに歩んできたと語り始めた。 学生の頃、教育実習や「音楽によるアウトリーチ」の実習にて人前で話すことが好きだと気づいた。自覚するだけでなく他者からの助言にも後押しされて自信を持ったという。歌だけではなく､喋ることを自分の強みにしていこうと確信した。所属している関西二期会でも、「歌の実力だけでソリストを勝ち取るよりも、司会ができる声楽家として仕事を広げていくべき」という助言を受け、実際にオーケストラの文化庁公演の司会者としてツアーに同行し、その翌年にはソリストとしても活躍した。 本学の「音楽によるアウトリーチ」の履修がきっかけとなり、谷田氏を含む4人で「アンサンブルちょうちょ」を結成し、今年で13年、通算で300回程度のコンサートを行ってきた。知名度のない新人グループ時代、演奏依頼を獲得するために西宮市の保育園、幼稚園約200件にチラシと手紙を送付した。その中で依頼があったのはたった1件であったが、その1件を大切に丁寧な仕事を行うよう心がけた。その結果、良い口コミが広がって次の演奏依頼へとつながった。保育園や幼稚園には姉妹園の存在や横のつながりがあるので、良い口コミを得ることが重要だと話した。ファミリー・コンサートの自主公演も企画しており、来場する保護者の口コミを広げることで、新たな場での演奏につながることもあると述べた。 次に、谷田氏自身の出産と音楽生活の変化に関する話題に転じた。 谷田氏は現在、3児の母で、男の子1人と双子の女の子を抱えている。1人目の出産では家族の協力もあり、産後2か月でオペラオーディションに挑戦し、産後1年でオペラ公演に出演したと言い、生活の変化もあまりなかったそうだ。しかしながら、次の妊娠で一卵性双生児ということが分かってからはドクターストップがかかり、30週からは管理入院のため、予定していた本番が全てキャンセルとなった。病室から出ることができない中で、病室のドアが開いた時に聴こえた院内コンサートの演奏に自然と涙があふれ、生の音楽の力を再認識したと語った。双子の出産後には度重なる声帯出血のため、歌うことができなくなった。歌うこと自体を辞めようかとも迷い、クラシック音楽が全く聴けなくなるほどに塞ぎ込

講座の概要	んでしまったそうだ。 　そんな最中にコロナ禍になり、歌う機会が激減したお蔭で休養することができて、再び歌うことができるようになった谷田氏は、ある意味、コロナ禍には感謝していると述べた。コロナ禍でどこにも出かけられない孤独な母親たちのために、インスタグラムで双子アカウントを作成。全国から双子の写真を 100 点集め、リモート演奏の動画を YouTube で流して反響を集めた。今の自分にできることは子どもたちを育てながら、いかに音楽を続けていけるかであると考え、ファミリー向けや子ども向けのコンサートに力を入れている。音楽って楽しい、クラシックっておもしろいと思ってもらえるための「種まき期間」だと述べた。 　学生の質問で、落ち込んだ時の立ち直りについて、「朝が来ない夜はない、止まない雨はない」という母の言葉を大切にしていると述べ、歌うことができなくなった時にも時間が解決してくれたからきっと大丈夫、とポジティブな言葉で講義を終えた。

〈学生のことば〉

・実際に女性の音楽家として現在も活動されている方からお話を伺うことができて嬉しかったです。女性である以上、男性以上に音楽をやめる機会が多いと思うので、結婚され、出産までされているということで、本当に強い方だという印象を受けました。グループで活動することの難しさや、大変さも知ることができました。(神戸 / 声楽 /1 年)

・「迷ったらやる」ということを一番大切にしているとおっしゃっていたのが心に残りました。私はいつも何かを始める時に考えすぎて、もしうまくいかなかったらどうしようと不安になって挑戦できないことがよくあります。今回授業を受けて、うまくいかなかった時のことを心配するのではなく、とりあえず挑戦してみようと思うことができました。挑戦しなければ成長することはできませんし、挑戦して失敗したのならその失敗の中からも学べることがあるのだと気づきました。
(神戸 / ピアノ /1 年)

・人生の中で、男性女性に関わらず、やらなければならないことや､やりたいことはたくさんあって、もちろん私もたくさんあります。でも、実際にはそれを全部はできないけど、やろうとする努力は大事だなと思いました。谷田さんもきっと家事や育児との両立は大変でしょうが、手を抜くことなくやっていらっしゃると思うので、自分も自分がしたいことに向き合って、両立できる方法を考えていきたいと思いました。　(神戸 / 声楽 /1 年)

・二回生になって将来の進路や留学のことなどをたくさん考えるようになって、どうしようかと悩んでいたので、谷田さんのお話を聞けて参考になりました。音楽を極めていく中でどうしても辛いことがたくさんあって落ち込んだりすることも多いのですが、前を向いて自分のがんばり次第で何とかなると信じて、今も音楽家として活動されていてすごいと思いました。音楽家として活動するためにはたくさんの方々に知って頂いたり、依頼をもらうために DM を出したり、とコストもかかり赤字になりがちですが、長年続けていくことで黒字になったり、オーケストラなどとよい関係を作って様々な仕事に繋がったり、と好きなことを仕事にできることでやりがいや達成感も毎回すごいだろうなと思いました。(神戸 / ピアノ /2 年)

・迷ったらやる、という谷田さんの信念を、私も意識していきたいです。やはり初めてのことや自信のないことはどうしても億劫になってしまいがちですが、やってみないとわからないことも一杯ありますし、新しい世界に飛び込むことで知らない自分の一面を見ることができたり、新しい道が開けてくると谷田さんの挑戦の数々を聞いて感じました。　(神戸 / ヴァイオリン /3 年)

2021年度　第４回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第４回ミュージック・コミュニケーション講座 「コードを使って曲を弾こう～ポップスやジャズの演奏法から学べること～」
講　師	鈴木 潤（ピアニスト、作曲家）
実施日時	2021年６月４日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoomで神戸に同時配信)
講座の概要	ピアニスト、キーボーディスト、作曲・編曲家として活動し、完全放置型の即興音楽ワークショップ「音の砂場」をはじめとした様々なワークショップ活動を展開している鈴木潤氏を講師としてお迎えした。昨年、一昨年にも講義をしていただいたが、今回の講義内容は、ポップスやジャズの演奏法に基づいてコードを理解し実践してみるというワークショップ形式のものであった。 導入として、東京音大の学生が５つの音を提示し、それらを１音ずつ同時に鳴らして響きを聴くことから始まった。その響きに不協和音も含まれていたことを認識した上で、和音というといわゆる三和音を思い浮かべがちだが、本来は導入で鳴らしたような音の重なりであり、コードとは和音の分類のために使われるものあるという考え方を前提として講義が進められた。 続いて、東京音大とオンライン参加の神戸女学院の学生が各自１音ずつ担当して和音づくりを体験したり、鈴木氏が楽譜を縦に見立てて「落ちゲー」を例に音符の配置と手の動きを図式的に解説したりすることで、コードの概念を分かりやすく読み解き、後に解説されるジャズにおける和音の平行進行に関して体感的に学んだ。 次のステップとして、三和音に番号をつけてコード進行を理解し、実際に曲に合わせて弾いてみるという体験をした。C Major（ドミソ）は１番、d minor（レファラ）は２番といったように番号をつけ、手の形を変えずに鍵盤を押さえることにより、どの学生も簡単にコードを弾くことができる。《めだかの学校》の歌に合わせて１、５、１、４、１…といったように学生自らが実践することで、コード進行が身近なものになった。また、和音の置き換え（１→３または６、４→２）による曲の変化を認識することで、多様なコード進行について体感することができた。実際に、学生がそれぞれ独自のコード進行を考えて発表し合うなかで、コードに対する苦手意識が軽減されたようだった。 また、クラシックとは異なるジャズの奏法についての解説では、クラシック音楽では禁則となっている平行進行や、ジャズ独特の指使い、身体の使い方などを講義いただき、学生は新たな知見を得ることができた。最後にパッヘルベルの《カノン》の和声進行をポップス曲へ活用し変化させていく実践を行い、メジャーコード、マイナーコード、キーチェンジについて学んだ。 まとめのお話として鈴木氏は、実際に演奏する際には、音名やコードのことに捉われず、音楽（音の響き）を届けるということが最も大切であると語った。ジャンルに捉われず音楽をすることがどういうことなのか、改めて考えさせられる講義であった。

〈学生のことば〉

・もともとコードを用いて自由に演奏することは大好きでしたが、今までクラシックを勉強してきたからこそ抜けきれていなかった概念を覆す内容もあり、とても面白かったです。また、なんでもよいから自分で考えて創作することは自分の意思を表現する近道でもあると思いました。それぞれの即興メロディーに個性がよく表れていて楽しかったです。今回はコードの入り口に過ぎませんでしたが、多くの音大生から見ると謎の文字列に見えるテンションの音などを解説、実践する機会があれば更に楽しさが伝わるのではないかと思いました。（東京 /MLA/4 年）

・クラシック音楽しか勉強していないので、どこかルールに縛られて「音楽」を難しく考えていました。今回の授業で、音楽はもっと自由で良いということを知ることができました。もっと、即興でピアノを自由自在に弾けるようになりたいです。本当にありがとうございました。

（東京 / ピアノ /3 年）

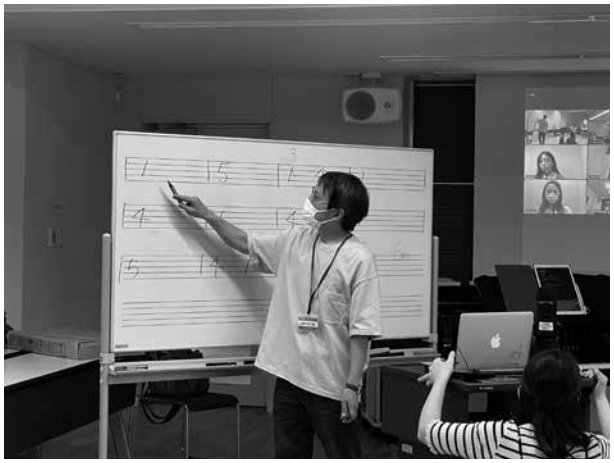
・今回の授業では主にクラシックとジャズ、ポップスのピアノという楽器へのアプローチの違いなどをお話ししていただきました。私はピアノ専攻から大学進学と同時にポップスの作曲へと転科したことで感覚的にピアノの弾き方を変えなくてはいけないということは感じていたものの、具体的にどのようなことをすればポップスらしくなるかという点でかなり悩んでいました。ですが今回の授業で先生がアプローチの違いを言葉にして話してくださったことで、今まで自分が模索していたことが整理されたような気がしました。

（東京 / 作曲 /2 年）

・自分で伴奏付けをしたりする際に使えるのではないか、と思いながら受講していました。「和声」として硬く考えるのではなく、音遊びの一環として捉えるだけでも気持ち的にはとても楽に取り組むことができると思ったため、和声の授業以外では音遊びだと思って伴奏などを作っていきたいと思いました。いくら頭で考えることができてもそれを実践できないと意味がない、ということも痛感できたため、実践することをメインに取り組んでみようと思いました。（神戸 / 声楽 /2 年）

・自分も実際に参加する形のワークショップのような授業は初めてだったのでとても新鮮で楽しかったです。コードネームは今、ソルフェージュの授業で学んでいる最中なので､知識が深まりました。ジャズの人が言っていたというすべての音階で 3 の指でひっくり返すというのは、したことがないのでなかなか慣れるのは大変そうですが、続けることで体に染みつく、というのはその通りだなと思いました。コードネームで曲をとらえるのが苦手でいつも困っていたのですが、今日様々な曲をコードネームで演奏してみて、苦手意識が少し薄れたように感じました。また同じコードで進行する曲がたくさんあることにすごく驚きました。有名な曲と同じコードを使うことで耳なじみがある音楽となり、流行るのかなと思いました。

（神戸 / ピアノ /2 年）



※写真は東京音楽大学での様子です。

2021年度　第５回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第５回ミュージック・コミュニケーション講座 「コロナ禍における公立ホールの挑戦」
講　師	衣川 絵里子（西宮市フレンテホール副館長）
実施日時	2021年６月11日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	Zoomにて配信（神戸女学院大学発信）
講座の概要	第５回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は西宮市フレンテホールの副館長、衣川絵里子氏を講師に迎えて、神戸女学院から発信した。 衣川氏は神戸新聞松方ホール、門真市民文化会館、神戸市立灘区民ホールと文化施設の担当者を歴任し、仲間とイベント会社を立ち上げて、近畿圏を中心に地域に密着した事業として企画や制作を行い、アートマネジメント講座やレセプショニスト講座、アーティスト向けのアウトリーチ講座等、また自治体・大学主催のセミナー等で講師を務めている。 2017年に西宮市フレンテホールの指定管理者に選定され、2018年より同ホール副館長。相愛大学音楽学部アートプロデュース専攻講師も務める。 2020年３月、兵庫県西宮市で初めての新型コロナウイルス感染者が出て、市内の公立施設は臨時休館になってしまった。４月の緊急事態宣言では、フレンテホールは自宅待機に切り替わり、テレワーク体制で自宅からウェブの情報発信や、ホールにいなくてもできる統計整理などを行ったそうだ。 同年６月には緊急事態宣言が解除され、ホールも再開となったが状況は何も変わらず、イベント開催にあたっての“自粛警察”によるパトロールが盛んで大変だった。９月にはイベント開催の制限が一部緩和されたが、開催に当たっての来場者の不安やさまざまな問題もあり、万全な状態の開催は難しかったと語った。 コロナ禍のアーティストへの影響としては、2020年２月後半から仕事に影響があり、コンサート開催に当たっても、主催者のみならずアーティストも批判を浴びる状況だった。「文化芸術は不要不急」という言葉に多くの人が縛られ、さまざまな批判や否定的な言葉によって、芸術が社会に必要とされているのかを悩み、考えたアーティストが多数いるのではないかと語った。 コロナ禍のホールへの影響については、主催事業の中止や延期・臨時休館に伴う利用者への説明やキャンセル手続き、お客様への連絡といった、本来のホール業務とは異なる状況が、体力的にも精神的にも辛かったと話した。６月にはホール独自のコロナ対策の取り組みをお客様にアピールすることで、安心して来場してもらえる工夫をした。中でも重視して伝えたのは「とにかく距離を取ること」だという。 イベント開催が延期になった際に、何かできることはないかと始めたのが動画配信だった。フレンテホールの企画「クラシック音楽謎解きミステリー音楽探偵バッハの事件」にちなんだ８作のショートフィルムを作り、９月のホールでのイベント開催に繋げるように工夫した。2020年９月に有料のライブ動画配信を行った時は、配信ならではの音響と視点を重視した。動画配信の目的はライブとストリーミングのハイブリッドをめざすことで、それぞれの強みを考えて活かしていくことが大事だと話した。 新型コロナウイルスが社会にもらした影響は、感染症であるにもかかわらず

講座の概要	メンタルへの影響が大きく、繰り返される自粛要請に従うことの不条理、不確かな感染予防対策への不平不満、良好だと思われていたコミュニティや共有できていたと思われる価値観そのものが揺らぐなど、さまざまなことがあった。相手の立場に立って考え事情を察し、一歩踏み込んで共感することができれば、非常時のギスギス感はなくなるのではないかと語った。 「文化芸術は可能性があると思うし、これからの社会に必要だと感じて仕事をしている。公立ホールとして、くじけずにやれることを実践して行きたい。皆さんも大変な中だが、元気に乗り切ってアフターコロナを迎えられように」という言葉で締めくくった。

〈学生のことば〉

・確かにコロナがアーティストに与えている影響は大きいと日々感じていましたが、今回具体的な話を聞いてその思いが深まりました。芸術が不要不急扱いとなってしまうのは、コロナ禍ではどうしようもないことだとは思います。しかし、芸術は人々の心を豊かにするもので、芸術に触れることで優しい心が生まれたり、新たな交流があったりすると思います。だから芸術の重要性を少しでも多くの人に伝えるように努めるのがアーティストの使命だと思いました。私も将来アーティストになりたいと思って勉強している身なので、自分なりに芸術のすばらしさを伝えられるようになりたいと思いました。ホールで感染対策を徹底しているシーンがありましたが、やはりホールで生の音楽だからこそ伝わるものがあると思うので、しっかりした感染対策をしながらホールで演奏できればよいと思います。（神戸 / 声楽 /1 年）

・コロナの期間中、本当に大変な思いをされたのだと思いました。世の中にはいろいろな人がいて、いろいろな考え方があるのは分かっているけれど、人は他人を思って、想像力を豊かにして行動すべきではないかと私も思います。こんな大変な期間ではありましたが、発見したことも多いと思います。オンラインでのコンサートや、感染対策をした上でのコンサート、まだまだ音楽には十分楽しめる方法がいくつもあると多くの可能性を感じることができました。実際に働いている方の話を聞けてうれしかったです。日本では音楽をしている人の立場がまだまだ弱いと思うので、もっと日本人の音楽の考え方が変わっていけばよいのにと思いました。（神戸 / 声楽 /2 年）

・日本ではどれだけ文化芸術が軽視されているか、このコロナ禍でよく分かったので、本当に腹立たしいというか、あらゆる娯楽が成り立っているのは誰のおかげだと思っているんだ (文化芸術がどれだけ多く、娯楽に関わる要素を担っているか)、という気持ちでこの 1 年半ほど一杯でした。嫌な気持ちになり正直もうあまり考えたくないので、この「コロナ禍における文化芸術」というテーマの授業は結構しんどいです。でも、バッハの事件録の様子は楽しそうでよかった。ストーリー仕立ての企画は好きなので、ワクワクしました。（東京 / ピアノ /3 年）

・今回の講座の中で一番印象に残った言葉は「押し売りにならない匙加減」です。授業でワークを考える際、どうしても自分の持っている知識を伝えることに集中してしまいがちでしたが、今回の話を聞いて、ワークだけでなく企画などでも音楽を専門に学んでいない人に楽曲を楽しんでもらうためには意識しておくべきことだろうと思いました。押し売りではなく寄り添うことを大切にしたいと思います。（東京 / 作曲 /3 年）

※写真は Zoom 配信による講座の様子です。

2021年度　第6回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第6回ミュージック・コミュニケーション講座 「危機の時代と芸術」
講　師	島﨑 徹（振付家、神戸女学院大学音楽学部舞踊専攻教授）
実施日時	2021年6月25日（金）14：10～15：30
実施場所	神戸女学院大学　エミリーブラウン館Bスタジオ（Zoomにて配信）
講座の概要	第6回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、振付家で本学音楽学部舞踊専攻教授の島﨑徹氏を迎えた。 島﨑氏は、日本での幅広い活躍はもちろんのこと、世界一のバレエコンクールであるローザンヌ国際バレエコンクールにおいて、審査員やコンテンポンラリー課題曲の振付けを行うほか、アメリカ、パリ、ベルギーなど世界中の一流カンパニーからのオファーが殺到する振付家である。 昨年度に引き続き、2度目となる今回の講義では、コロナ禍において自身の体験から気がついたことや、周りの芸術家たちを見て思うことを主に語った。 コロナ禍での自粛期間中、毎日約12キロメートルのランニングを行い、減量と体力づくりに成功したという。「身体に労働を合わせるのではなく、労働に身体を合わせていく。身体はしんどくて逃げようとするかもしれないが、大切なのはそれでもやらなければならない労働をやり続けること。そうすれば、次第に身体は慣れてくる。それができるようになると、あとは精神が逃げようとする。だが、その頃には精神を置いていても身体が動けるようになっている。そうやって労働に合わせて身体は進化させることができる」と述べ、芸術においても苦労して努力することで進化していくことができるのだと語った。 コロナ禍をきっかけに、さまざまなことがオンライン化し、ライブ配信のコンサートが多く開催されていることに対しては、オンラインがこれからのパフォーミングアーツであると言わんばかりの世間の認識に、「こんなものがパフォーミングアーツなら止めてやる、これは自分のやりたい芸術ではない」と声を上げる芸術家がいないことに疑問を覚えるそうだ。 さらには、オンラインで本来の自分以上の自分を見せようとし、自分をよく見せるイメージだけを作る人が多くいることを指摘し、本当の芸術を極めている人が少ないのではないだろうかとも述べた。 こういう時代だからこそ、文化は守らなければならないし、芸術を支えていこうとならなければならない。ただ、それは芸術家側からではなく、観る側の人間からの声が上がらなければ意味がない。観る側からそういった声が上がらないのは、芸術をしている人間が、芸術の持つ力を世の中の人々に証明できていないからだと言う。芸術に救われたり、心を動かされたりといった経験をさせることができていないのが現状であり、芸術さえあれば何もなくても生きていけるのだという芸術家側のパワーがないといけない。そういった信念を自らの芸術を通して浮かび上がらせることが重要だと語った。 本当の芸術とは、自分の芸術を他の人が観る前と観た後でどう変えたいかを明確にすること。その想いを芸術を通して表現できるかどうか。その表現のために自分の人間力を高め、生き方を変えていかなくてはならないと語った。 心理学者のダリル・ベムが唱える「自己知覚理論」では、他人が人に優しくする

講座の概要	行動を見て「この人は親切である」と認識する。これと同様に、自分に対しても行動をもって自分がこういう人間であるという認識を変えることができる。自分が決めてやっている行動の積み重ねによって、「自分はこれが得意な人間だ」と認識できることから、自らの芸術も稽古の積み重ねによって、人間の内面から変わっていくことができると島﨑氏は論じた。 　最後に、「私たち芸術家には、芸術そのものが自分を高めるツールになる。芸術をやらない多くの人々よりも恵まれており、この喜びを自らのガソリンにできるかどうかが大切」と学生たちに熱く語りかけた。

〈学生のことば〉

・音楽の力や、舞台芸術はどれだけ偉大かということを実感することができました。「日常からかけ離れた経験をすることができるのが音楽、芸術活動である」という言葉はその通りだと思い、感銘を受けました。「アーティストはいつからコジキに？」とおっしゃっていたと思うのですが、その言葉を聞いて考えさせられることが多々ありました。コロナ禍で状況が一変して、ライブ配信や無観客ライブなどが増える中、それに対してアーティストからの抗議がないというのも、仕方ないと思って、そこに疑問を抱くことはなかったので、新たな視点から考えることができました。本人の音楽に対する在り方の定義が定まっていないからこそ、状況が変わったらそれに合わせて生きるために稼げたらいいとしか音楽に対して考えていない、だからこそ「アーティストはいつからコジキに？」という発言が生まれたのではないかと思いました。　（神戸 / 声楽 /2 年）

・今、芸術や音楽をやっている人は自分を自分以上に見せようとする、イメージを膨らませようとすることに必死だという話を聞いてすごく納得しました。自分もおそらく自分以上に見せようとしている部分があったので、イメージを膨らますのではなく自分を作ることが大切だと思いました。身体を労働に合わせるのではなく労働を身体に合わせるというのはその通りだと思いました。疲れたからもう終わりではなく、身体を労働に合わせることでより自分の音楽が磨き上げられるのではないかと思いました。そのことによって自分に自信を持つことができ、演奏にも表れるのかと思いました。コロナ渦においてパフォーミングアーツが少しずつ変わってきており、本来のように音楽を楽しむことはできないというのは私も感じるので、早く元の社会に戻るといいなと思いました。　（神戸 / ピアノ /2 年）

・島崎徹先生の中継講座を聞いて、改めて色々なやる気を感じることができました。「行動は自分で変えられる、ここで無理だって決めつけて諦めない」という言葉を聞いて、自分の限界はここまでなのではないかと勝手に決めつけて諦めている自分が思い浮かんでハッとしました。アーティストにおいて自分という信念を強く持ち、自分の練習になお一層励み、堂々とした演奏ができるようにがんばりたいと思います。貴重な話をありがとうございました。　（東京 / ピアノ /3 年）

・音楽家にとって一番弱い部分や感覚的に慣れてしまっていた部分について焦点を当てた話でした。冒頭の葉加瀬太郎の話もそうですが、所構わず、どんな場所でも自分をアピールできる人が仕事に繋がり、それがターニングポイントとなることが多いのを併せて理解することができました。当たり前に音楽に接しているからこそ、感動する基準も高くなったり本来の意味で楽しめなかったりするのかなと思います。一人の人間として音楽に携われるようになりたいです。

（東京 /MLA/4 年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2021年度　第７回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第７回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽家のためのコーチング～より良き指導者になるために～」
講　師	的場 誠治（ウインドカンパニー株式会社代表取締役、神戸女学院大学非常勤講師）
実施日時	2021年７月９日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	Zoomにて配信（神戸女学院大学発信）
講座の概要	第７回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、ウインドカンパニー株式会社取締役で本学非常勤講師のトロンボーン奏者、的場誠治氏を講師に迎えて、神戸女学院から発信した。的場氏はコーチング技術を用いて、吹奏楽の指導者として、70回以上のコンクールで指揮の経験があり、東海大会、関西大会、管楽合奏コンテスト全国大会を導いている。 「今回の目的は、人を望ましい方向へ導くコーチングのすばらしさを実感して頂くことです」と前置きして講座が始まった。 まず、コーチングの前提となる６つのテーゼを提示した。 1. 人間が外的な情報を得るのは五感による。 2. 私たちは必要な資源をすでに内的に持っている。 3. 地図は実際の土地そのものではない。 4. 全ての行動には肯定的な意図がある。 5. 失敗はない。フィードバックがあるのみである。 6. 選択肢がないよりは、ある方がよい。 コーチングとは、人間の無限の可能性を信じることである。プロテニスコーチであるティモシー・ガルウェイの著書『インナー・ゲーム』では、「自分の可能性に気づくことを支援すること」「コミュニケーションを通じて、相手が自分の望む方向に主体的に進むことを支援する技術」と記されているとの説明がなされた。 次に、的場氏が実際に学んだコーチングについて次のように述べた。 【学ぶ前】 1. 起きている問題よりも、生徒の人間性に焦点を当てていた。 2. 生徒に対して注意や指示をする。 3. 練習をさせていた。 【学んだ後】 1. 生徒のなぜできないかという内的な問題などに寄り添えるようになり、起きている問題の解決にコミットするようになった。 2. 生徒が自信を取り組めるようなフィードバックに変わった。 3. 自分の可能性に対する発見、責任、コミットメントを導き、心に火を灯す指導を追及。 引き寄せのコーチングには「Be」（心の状態･有り様､主体的か･依存的か）､「Do」（言動･行動）､「Have」（結果）という３つの段階があり、コーチングはこの「Be」

	を磨いていくことが重要だと述べ、これを基に８つの質問を投げかけ、実際にコーチングを行った後、NLP（神経言語プログラミング）トレーナーのロバート・ディルツが作成した図「ニューロロジカルレベル」を見ながらさらに説明した。 続いて、成長の４段階を以下のように示した。 1. 無意識的不能→丁寧に教えることが重要 2. 意識的不能→他人と比較せず、自身と比較させる 3. 意識的有能→正しい情報を与える 4. 無意識的有能→何も考えずとも、当たり前のようにできるようになることを実感させる この４段階の流れを理解して指導するのがプロの優秀なコーチである。指導する中で大切なのはキャリブレーションであり、非言語要素（相手の表情、目線、態度、足、姿勢、頷き方などを見る）と言語要素（相手の話し方、声の状態、使っている言葉などに耳を傾ける）から相手の雰囲気を感じるというように、見て、聴いて、感じながら五感を研ぎ澄まして観察することがコーチとしての重要なスキルになる。 コミュニケーションの大前提は信頼関係を築くこと。それをラポール形成といい、このラポールを築くように努力すると、安心感、親近感、好感を与え、相手との信頼関係を築きやすくなる。ラポール形成のスキルとしては、①ペーシング（喋り方のペース・声のトーン）、②ミラーリング（動きを鏡のように真似する）、③バックトラックペーシング（相手の発言した言葉をオウム返しに繰り返す）、などのテクニックが重要である。実際にZoomのブレイクアウトルーム機能で15分間、グループ毎にこれらのテクニック用いたバックトラックペーシングの会話を行った。 最後に、五感を活用する「フューチャーペーシング」について、人間の脳はイメージと現実・過去・未来の区別ができない特性があるとし、これを活用して、演奏の本番にどう向き合うべきかを話した。五感でイメージできるような質問を実際に行い、このようにイメージして行うことは効果的であり、ぜひ実践してみてほしいと締めくくった。

〈学生のことば〉

・実際にバックトラックページングとリーディングを実践してみて、相手が自分の話に共感してくれている、しっかりと話を聞いてくれているというのが伝わってきて、実践することで学べることが多くありました。その際に３人組だったのですが、２人とも東京音大の学生さんで、初めて話をしたにも関わらず、実践することで話もスムーズに進み、変な沈黙もなく、楽しく話すことができました。（神戸 / 声楽 /2 年）

・私は自分の弱いところに焦点を当て勝ちなので、まず自分自身が自分の可能性を信じることも大事だと感じました。生徒の可能性の引き出しを導くのは、指導するコーチによって大きく変わるのは前から理解していましたが、いい指導はどのようなものなのか詳しく分かりませんでした。けれど、文章化された三角形の図のニューロロジカルレベルや、四段階を意識した成長の図、キャリブレーション等が分かりやすく、私の将来についても深く考えさせられるものがあり、私自身も普段から意識してみようと思いました。

（東京 / ピアノ /1 年）

・私にとって、ピアノは好きではないが得意なことであると言えるのは正に、④の無意識的有能の域に達しているからだと思いました。もちろんピアノにおいても、向上を望むのならば更に努力が必要なのは言うまでもないですが、現状維持ならば多少手を抜いていても可能な域に達していて、そのお陰でピアノ以外の、声楽や作曲の分野の勉強に力を注ぐことができています。

（東京 / ピアノ /3 年）

2021年度　第８回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第８回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ②： 音楽家を目指す大学生が卒業までに知っておくと得する７つの秘訣」
講　師	別所 ユウキ（ピアニスト、神戸女学院大学音楽学部卒業生）
実施日時	2021年７月16日（金）14：00 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学　合奏室（神戸女学院大学のみの授業）
講座の概要	第８回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、「ようこそ先輩シリーズ」の第２回として、神戸女学院大学のみの講義で卒業生の別所ユウキ氏（M123回生）を講師に迎えた。 別所氏は、大阪生まれ、イギリス・ベルギー育ちのピアニストである。神戸女学院大学音楽学部、ブリュッセル王立音楽院マスター課程を首席で修了した。また、ファビオラ女王の御前演奏をはじめ、世界各地で演奏活動を行う。帰国した現在は、演奏活動・アウトリーチ活動・後進の指導・動画配信の他、コロナ禍等で生の音楽に触れる機会が減ったこどもたちに向けた、音楽教育系コンテンツの企画・制作を進めている。 今回の講義では、「音楽家を目指す大学生が卒業までに知っておくと得する７つの秘訣」を体験談を交えながら紹介し、それぞれの解説を行った。以下はその抜粋である。 【1. 留学をしよう】 日本とは違う環境で、音楽に触れる。ヨーロッパなどはクラシック音楽の文化を持つので、音楽が身近にあり、演奏する機会も多くある。お客さんとの距離が近く、演奏会やコンクールの休憩時間に話しかけられ、感想や批評を聞くことができる。社会の中で音楽家として受け入れられる感覚が励みになる。 【2. 国際コンクールを受けよう】 小さいものから大きいものまで規模が様々であるが、大きいものになると膨大なプログラムを用意しなければならなくなる。そのため、在学中からレパートリーを増やすことが必要になってくる。コンクールでは参加者同士の絆が生まれ、励まし合い、友情を育むことができる。審査員や観客からの評価は、自分を客観的に見つめなおす機会として良い経験である。 【3. 人生のプライオリティを考えよう】 卒業してから仕事に就くのか、結婚して出産をするのか。どの道を選択するとしても、自分にとっての幸せの定義を明確にするべきである。子育てをしながら演奏の仕事をする難しさなどはあるが、パートナーや保育園など周りの理解と協力も必要不可欠であった。 【4. マーケティングを学ぼう】 セルフマネジメントをどう行うべきかを考える。消費のされ方の多様化＝生演奏→録音媒体→インターネット配信と変化していることを理解した上で、どういう人が何を求めているのか、それに対して自分はどういう価値を提供することができるかを考える。 【5. テクノロジーを使いこなそう】 グランドピアノは電子ピアノよりも優れているのかどうか。例えば、アウトリーチ訪問演奏などの、ピアノのない場所での仕事に持ち込むことができる利点。いろんな音色を出すことが可能であったり、録音や音源作成が可能であるという利点がある。現代では動画作成や配信など、電子機器の扱いが必須になっている。 【6. マネーリテラシーを身につけよう】 学生の頃は無料での演奏やお金を支払っての演奏が多いが、自分の労働に対する適正な価格設定を決めるべきである。それと共に確定申告や補助金、契約書などについても考えておく。 【7. 芸術家としての価値を再考しよう】 自身にとっての芸術とは、音楽とは、を考える。音楽家や芸術家の存在は、国の文化力の証明にもなる。

講座の概要	最後の【7.芸術家としての価値を再考しよう】の部分では、別所氏の知人である世界中の音楽家たちに、コロナ禍で感じたことを事前インタビューしていた。東京で活動する作曲家と大阪で活動するクラリネット奏者は、オンラインでは自らの求めるものが表現できないことや観客の存在を感じられないこと等、コロナ禍でのオンライン化の厳しさを指摘した。 スペインの音楽院でピアノ講師をしている知人は、ピアノ講師という職業が、警察官や医者等と同等の扱いを受けるため、しっかりとした補償を受けることができた。ドイツ在住のフランス人ピアニストも、ドイツではロックダウンの際に補償金が5000ユーロ支給された。アーティストの間でYouTubeが流行したことによって、普段クラシックに馴染みのない若者たちがクラシックに興味を示すようになったという。それにより、最近の屋外コンサートではそういった観客が増えたことを喜ばしく思っていると述べたそうだ。 最後に、別所氏は「ピンチはチャンス。コロナ禍で制限は多くあるが、そこから生まれるチャンスもあるかもしれない。自分の音楽への思いや芸術への情熱を信じて、これからも突き進んでほしい」と学生たちを激励した。

〈学生のことば〉

・大学生の間にしておくべきこと、身に着けておくべき知識や準備、それらを今後どう生かすかなど、たくさんのことを知ることができて勉強になりました。特に「人生のプライオリティを考え、自分にとっての幸せの定義を明確にすることが大切」という言葉が印象に残っています。今はまだこの先の人生設計などは全く決まっていませんが、自分が続けたいと思うことを続けるためにはどうするべきなのかということをしっかりと考えて準備したいと思いました。

（神戸 / ピアノ /1 年）

・音楽家の人生において、多くの大切なことを学ぶことができました。わたしは自分に自信がなく、あまり積極的とは言えません。臆病で留学をするのも怖いと思ってしまいます。しかし、この講義で留学に関する話をたくさん聞いて、関心を持つことができました。人生のプライオリティーを考えるということで、改めて自分がどのような人生を歩みたいのか考えるきっかけをもらい、感謝しています。テクノロジーやマーケティング等、現代において音楽で生きていく力を身につけるために必要なことをたくさん教えて頂いて素晴らしい講演でした。（神戸 / 声楽 /2 年）

・自分の考えを伝える、自己主張をきちんとする、という当たり前そうなことですが、それがいかに大切か、ということを改めて痛感させられました。将来に迷いが出ていて、自分が何をしたいのか分からない、私が音楽を続けていく意味はあるのか、と悩んでいたし今も悩んではいるのですが、自分にとっての「幸せの定義」を確立することが大切だと思うので、自分の中での考えを軸に持ちたいと思います。自分が何のためにレッスンを受けているのか、という言葉が胸に刺さり、自分を見つめ直すよい機会として夏休みを有効活用していきたいと思います。（神戸 / 声楽 /2 年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2021年度　第9回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第9回ミュージック・コミュニケーション講座 「カラダを奏でる非言語の身体コミュニケーション ～ 動きと音は双子のきょうだい !?～」
講　師	新井 英夫（体奏家）
実施日時	2021年9月24日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	Zoomにて配信（東京音楽大学発信）
講座の概要	9回目のミュージック・コミュニケーション講座は、各自デバイスでZoomにログインし、それぞれの場所から参加する形式で実施した。講師には、体奏家として活動されている新井英夫氏をお招きした。新井氏は、国内外でコンテンポラリーダンサーとして活躍すると同時に、日本各地の教育・福祉・社会包摂に関わる様々な現場で「からだを奏でるワークショップ～ほぐす・つながる・つくる～」を実施している。本来であれば本学に足を運んでいただき、対面でワークショップを実施の予定だったが、残念ながらZoomでの開催となった。 導入として、参加者全員で曲の緩急が変わるラジオ体操を行った。誰もが知っているラジオ体操ではダンスの経験の有無に関わらず、全員参加が可能であり、それぞれ離れた場所で参加していても一体感が生まれ、画面の前で固まりがちな身体をほぐすことができた。 次に画面上の他人の動きを真似するゲームや、日本語のオノマトペが表現する動きを当てるゲームを行った。Zoomではカメラに映る範囲内が表現のフィールドになり、この特性を利用して、画面に極端に近づく、フレームアウトしてみるなど、対面とは違った面白さがあり、学生にとってZoom上の表現の有益な示唆が得られた。オノマトペを表現するゲームでは、身体で表現しようと思うと、大人は頭でどのような動きが適切か考えてしまい、身体が硬直してうまく動けないが、新井氏の「とにかく声にだして身体を動かしてみる」という助言でなにごともやってみる大切さを学んだ。 最後に、ジョン・ケージの『4分33秒』をテーマにそれぞれの場所の環境音楽を図形楽譜化する活動を行った。『4分33秒』は、演奏者がステージに上がり何も演奏せずに周りのノイズを聴く哲学的な「作品？」である。コロナ禍で、イヤフォンやヘッドフォンを通した、不要なノイズがカットされ整った音がコミュニケーションの中心となり、身の回りのノイズに耳を傾ける機会がなくなっている。そういった背景からあえてマイクをオフにし、周りの環境音に耳を傾ける時間を設けた。環境音を基に作った図形楽譜を発展させ身体表現や、楽器の演奏に置き換えるという提案もいただいた。 Zoomという制限がある環境でもクリエイティビティを生かす新井氏のワークショップは、学生にとって、逆境であっても活動を続ける上で有益な示唆となった。

〈学生のことば〉

・とても面白く楽しい時間でした。国柄なのか、振り切って表現することに対して消極的になってしまう人が多い中、それぞれが自分の殻を破ろうとしている姿は印象的でした。今回はZoom上だったのでなんとなくシュールな状況になってしまいましたが、みんなで集まってすることができればより楽しめたと思います。アイスブレイクなどにも役立つと思いました。その中で、どの程度の表現をするか（促すか）ということについては加減をすることが難しいと思いました。初対面で普段は芸術的な表現することをしない人など

に対して、このようなワークを行う時はどのように組み立てていくのかを考えさせられます。いかにして面白さを伝えるかも腕の見せ所なのかと思うので、今後の授業や経験などを通して培っていきたいと思います。（東京 /MLA/4 年）

・Zoom の機能を最大限使って、「話す」以外のコミュニケーションの取り方があるのだと知ることができました。普段のオンライン授業に比べて自分から主体的に動くことが多かったので、少し恥ずかしい気持ちもありましたが、90 分間とても楽しく講座を受けることができました。最初、二人で真似しあったときは、あまりアイディアが湧いてこず、次は何をしようか迷いながらしていたのですが、全員集まった時に、ほかの方がしている合図をみて、そんな動きもあるのだと新鮮で、楽しかったです。次に行ったオノマトペを表現するアクティビティでは、東京音大の学生さん、先生、講師の先生、女学院の後輩というメンバーだったのですが、一人ひとり出てくるオノマトペや、動きが様々で面白かったです。またそこで、一つ動きがあるたびにそれぞれ反応があり、とてもあたたかい空間でした。最後の空間にある音を絵に表すアクティビティは時間がなく、皆さんの周りの音を詳しく知ることはできなかったですが、それぞれの場所から一つの講座でつながっている事が実感できました。空間にある環境音を絵や線に表すのが意外に難しかったです。

（神戸 / ヴァイオリン / ３年）

・最初は音を口で言いながら身体を動かすことに、照れや抵抗がありましたが、身体を一緒に動かすことでペアの方と自然に笑い合うことができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。また、日常の中で周りの音に耳を澄ますことがあまりないので、とても落ち着くことができたと共に、家の周りに溢れている音を改めて知ることができました。そして、目や耳で捉えた情報を身体で表現することの難しさも感じました。その際、口に出しながらするとやりやすかったり、簡単に表現できたりしたのが、とても興味深かったです。普段、授業の時などで、硬い会話しか交わさない教授の方々と、一緒にフランクに楽しむことができて良かったなと思いました。一つの音でも表現の仕方にはたくさん種類があって、人間の多様性というものを大いに感じました。とても興味深い講義でした。（神戸 / 声楽 / １年）

・今回の講座のように、身体を使って何かを表現することで他者とのコミュニケーションを取る、というのは今まであまりしたことがなく、斬新だなと思いました。Zoom ではカメラオフ、マイクオフで講義を受けることが多いので、このようにみんながいる中でペアの人とコミュニケーションを取ったり、ビデオ参加者以外を非表示にしたりして、ブレイクアウトルームではなく全体のセッションで他者と繋がれるのはすごくいいなと思いました。自分が実際に行っている動きと違う擬音を言う、と言うのはなかなか思いつかず、少し難しいなと思いました。（神戸 / ピアノ /2 年）

※写真は Zoom 配信による講座の様子です。

2021年度　第10回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第10回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ③：音楽作りワークショップを学ぶ」
講　師	東 瑛子（神戸女学院大学音楽学部卒業生）
実施日時	2021年10月1日（金）14：00～15：30
実施場所	神戸女学院大学　合奏室（神戸女学院大学のみの授業）
講座の概要	第10回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、「ようこそ先輩シリーズ」の第3回として、神戸女学院大学卒業生の東瑛子氏（M125回生）を講師に迎えた。 東氏は神戸女学院大学音楽学部、同大学院音楽研究科修了、並びに英国ギルドホール音楽演劇学校修士課程リーダーシップ専攻修了。アウトリーチ活動やコラボレーションに加え、音楽作り、リトミック、即興を用いた音楽プログラムを研究、実践している。 「今回は音楽・音というものを使って人と人がどのように関係を作っていけるのかをいろいろな角度から試し、ワークショップの中でいろんなアプローチを試みながらやっていきたい。自身の声や動き、空間、この場にいる上でできることをたくさん試してほしい。今回のテーマは普段しないことをすることです」という言葉で講座が始まった。 ●導入のアイスブレイク 参加者で円になって、東氏の後に続いて真似をし、手や足、全身を使って声を出しながら体をほぐし、部屋の中を自由に歩き周り、講師が出した「①アップ、②ダウン、③クラップ、④スタンプ」という合図に合わせてアクションを取る等が行われた。学生は戸惑う様子もあったが、次第に緊張もほぐれて、周りの動きを見ながら実践していた。 ●人文字や体全身を使うアイスブレイク 言葉を用いずに、決められたアルファベットを参加者で人文字を作って表現するアイスブレイクが行われた。お互いがどう動くか、どこに動くかなど動作に迷う姿があったが、何度か実践する内にジェスチャーを使いながらうまく表現していた。 ●コール・アンド・レスポンス 次に、足でリズムを取りながら声を発するワークが行われた。その後、ボールを使って自分または相手の名前を呼びながらコール・アンド・レスポンスを行なった。東氏は、「基本的に人と繋がる時には、発すること、受けとめることが大事だが、特に今日はそれを意識して行ってほしい。その時に必ず言葉を発することは必要ではなく、相手に向けたアイコンタクトや、ジェスチャーによって人の注目を引き付けることができる。このようなことを、あらゆる方法で今日は実感してほしい」と述べた。 ●ボディ・パーカッション 全身を使って、言葉にリズムを当てはめるボディ・パーカッションを行った。何度か実践した後、3グループに分かれて、グループ毎にそれぞれ考えてボディ・パーカッションを創作し、グループ発表を行なった。全く異なるタイプのものが出来上がり、各グループの個性が発揮されていた。 発表したものをより発展させるにはどうすればよいかと問われ、どのようにす

講座の概	るとダイナミックになり、分かりやすくなるのか、各グループの違いは何かに注目して考えてほしいとアドバイスがあった。そのアドバイスにより、リズムがより明確になったり、強弱の変化がつくなど、各グループのおもしろさをさらに引き出すことができた。東氏は「このようにグループワークを行うことで、おもしろい対話が出来上がった」と述べた。 ●楽器に触れて音楽創作 用意された様々な楽器から、好きな楽器を選んで音楽創作が行われた。それぞれ楽器を選んだあと、東氏から「実際に音を鳴らす時に、何げなく音を出すのではなく、よく考えて一音を出してください」と説明があり、学生は合図に合わせて音を鳴らしたり止めたりと演奏をした。 東氏は、「言葉で伝えられない時は、考えながら作り、表現することが大事」と強調した。再び、どのように音を表現するのかを考え、それぞれが音を出した。その後、自分の楽器と似ている人とペアになって、相手の音を聴きながら即興演奏を行った。 最後に、「ここで皆さんに伝えたのは作り手の意識。皆さんは楽譜を読んで意図を汲んで発信すると思うが、そこではいかにおもしろくするかを考えなければならない。自分の中にある感覚を使って、先を読むという力をこの場で探してほしいし身につけてほしい」という言葉で講座を締めくくった。

〈学生のことば〉

・今回の講座では、皆でその場になんとなく音を生み出して、そこから音楽にして行ったり、皆でその場を成り立たせるような活動が多かったので、それが音楽活動をしていく上で大切なことなのかもしれないと思いました。実際、音楽は人に聴かせて初めて成り立つものであるし、音楽を通して人と出会ったり、その人達と共に演奏したりすることも音楽そのものだというような気がします。今回の講座を通して、人と人との出会いを大事にしようと改めて思いました。また、音楽に限らず、自分がその時いる場所に溢れているいろいろな音に耳を澄ましてみようと思いました。そうすることで気づくこともたくさんあるし、そこから新しい音楽を生み出せる可能性があることも知ることができて良かったです。自分で新しく何かを生み出すには独創性が必要なので容易なことではなかったですが、それもアーティストには必要なことだと思いました。　（神戸／ピアノ／１年）

・初めて音楽を、体を動かしながら目に見える形で勉強できて、とても楽しかったです。人によって、またはグループによって作り出されるリズムが違って、それを鑑賞することで新たな発見があり、また、そのリズムをどのように組み合わせるかで音楽が変わり、相手に印象や雰囲気が変わることがわかり、興味深かったです。普段学んでいる音楽を、体を動かしながらもう一度学ぶことによって、音楽の奥深さを知ることができ、より一層理解が深まった気がします。とても楽しくてあっという間に時間が過ぎてしまいました。次回も楽しみにしております。　（神戸／声楽／１年）

・ワークショップという形式の授業や講座を対面で受けるのが初めてだったので、受講生の皆さんと少し仲良くなれて良かったです。身体全身を使って、音楽を鳴らしたり、楽しむということを普段あまりしないので、ボディーパーカッションはすごく新鮮でした。楽器を使って、自分たちで組み合わせや順番を考えて、音楽を作り上げるのは楽しかったです。　（神戸／ピアノ／２年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2021年度　第11回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第11回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ④：音楽作りワークショップを学ぶ」
講　師	東 瑛子（神戸女学院大学音楽学部卒業生）
実施日時	2021年10月8日（金）14：00～15：30
実施場所	神戸女学院大学　合奏室（神戸女学院大学のみの授業）
講座の概要	第11回の「ミュージック･コミュニケーション講座」は、「ようこそ先輩シリーズ」に第4回として、前回に引き続き、神戸女学院大学のみの講義として東瑛子氏（M125回生）を講師に迎えた。 前週と同様、ボディパーカッションや、自分の名前を言いながら目が合った人にボールをパスしたり等のアイスブレイクから始まった。輪になってボディパーカッションを用いたリズムを叩く人と、声を使って様々な音を出す人に分かれて合奏をしたり、それを合図によって入れ替えるということも行った。 音楽作りの面では、学生たちが専攻楽器ごとに分かれて、ピアノチーム、声楽チーム、その他楽器チームの3チームでグループワークを行った。 『Am→B♭→Am→B♭……』の2つのコードの繰り返しで、各チームがそれに合わせた旋律やハーモニーを生み出した。その後、チームごとに出来上がったものを聴き合って意見交換をした。 東氏は、「答えがないからこそ、どうにでもできるが、ここで相応しいものはどれだろう？と考えることが大切。ただ繰り返すのではなく、どうおもしろく繰り返すのか等を考えて工夫する必要がある。それは自分の演奏でも重要なことのひとつ」と説明した。 その後、学生にリーディング（指揮者）体験として、どのチームのどの楽器から始めるか、どういった音量で、どういった組み合わせで演奏するかなどをハンドサインで指示しながら、作品として仕上げてみるということを行った。ここでは、自分の意図を相手に明確に伝えられるように指示の方法を考えなければならない、と東氏からアドバイスがあった。 全員で演奏したあと、東氏から重要なポイントについて、スライドを交えた話が行われた。ワークショップでは、最初にアイスブレイクを行うが、ここでは人との間にある壁を融かすだけではなく、固定概念も一緒に融かすことが大切である。相手を信頼することも大きなポイントとなる。全員が対等な立場であり、立場の上下がないことがワークショップの特徴である。そこには「正解」というものが存在せず、正解をゴールとしないこと、必ずしもゴールがあるとも限らないと述べた。 東氏自身はワークショップを通して、人や音楽と「繋がる」ということを意識しており、繋がることで何ができるかを探るのだという。 最後に、学生に向けて「皆さんは次にどのような行動をしますか？何事も、ワークショップでやったような『次はどうする?』を考えてほしい。それを学生の内にいろいろと試してほしい。演奏だけでなく、どんなことにおいても『次はどうする?』をたくさん探してほしい」と激励して講座を締めくくった。

〈学生のことば〉

・今回は、前回と違ってそれぞれの専攻楽器で即興で合奏を体験しました。即興はあまりしたことがなかったので、初めは戸惑っていましたが、感じが掴めてくるととても楽しかったです。前回も感じたことですが、人とつながることでその場を成り立たせる力が音楽にはあると思いました。皆で考えた即興演奏が良い感じに組み合わさってアンサンブルできている時、とても心地よかったです。アヒルの親子体験は、目を閉じたままどこかへ連れて行かれるのはとても不安でしたが、普段とは違う視点に立つきっかけのようなものになったと思います。また、誰かと即興演奏で合奏してみたいと思いました。街中などで、フラッシュモブのように、歩いてくる人々を皆巻き込んでその場に即興で音楽を生み出せたりしたら楽しいかもしれないと思いました。また、専攻の先生によく自分の中で思っているだけではなく、伝えなければならない、自分で思っている三倍以上表現するくらいでないと相手には伝わらないとよく言われるのですが、今回のような取り組みでも、恥ずかしがったり、何もしないでいると何も始まらないので、自分の中にあるものをしっかり出していくこと、それを皆に伝える努力をすることはとても大切なことだと改めて感じました。

（神戸 / 声楽 /1 年）

・今回は人数が増えて、それによって前回の打楽器だけの時より選択肢も沢山あり、とても楽しい時間でした。同時に 2 年前、小学生のこどもたちと一緒に音楽を作った時のことを思い出しました。今回の授業ではみな顔見知りでしたが、小学生の子どもたちはお互いも、私たち大学生とも初対面でした。その中で積極的にアイディアを出してくれたり、前に出ていけた子が多かったのは、この授業のテーマである、つながるということが、音楽を通してできていたからだなと再確認しました。日本ではどちらかというと、協調性が強く、あまり個性を出しにくい人が多い中で、こういったワークショップをするのは少し難しい部分もあると思います。私も普段はそういった積極的な部分を忘れたり、消極的になってしまったりしますが、ワークショップを通して、段々と内面にあるものを人と共有していくことの大切さを思い出しました。　（神戸 / ヴァイオリン /3 年）

・今回は前回よりも先輩が増え、たくさんの方と一緒にこの講座を受けることができ、学ぶこともたくさんありました。また一回生はコロナの影響があり、先輩方の交流が少なかったので、いろんな先輩方と一緒に体を動かしたり曲を作ったりすることができてとても楽しかったです。1 回目の時は、なぜ東さんがずっと小さな声で話すのか疑問に思っていましたが、2 回目を受けて、これは小さい音に耳を傾けることで耳を慣れさせ、小さい音も聞けるようにするためなのかなと思いました。私は自分でハモリを考えたことがなかったので、即興で作るときにはとても困ってしまって、周りの子の助けを借りてしまいました。でも、音大生ならではの演奏が聴けて、とても感動しました。初めて、曲がどのように作られているのかを実際に体を動かしながら知ることができ、非常に理解しやすかったですし、興味深かったです。言葉で表現するのは難しいのですが、人とコミュニケーションを取りながら音楽を奏でることの楽しさを強く感じました。東さんが私たちと同じ目線に立ってくださって、私たちの作るものを否定することなく、全て肯定的に受け止めてくださって、ときにはアドバイスをくださったおかげで、自由に楽しむことができました。また、普段あまりしないような動きをしたりしたので、興味深く、新鮮で面白く感じることができたのだと思います。素敵な時間と貴重な体験をありがとうございました。本当に楽しかったです。

（神戸 / 声楽 /1 年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2021年度　第12回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第12回ミュージック・コミュニケーション講座 「学校で教えてくれない音楽：導入編」
講　師	大友 良英（作曲家）
実施日時	2021年10月8日（金）14：10 ～ 15：40
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（東京音楽大学のみの授業）
講座の概要	作曲家として数多くのテレビ・映画作品の音楽を手がけ、自身もジャズ・ミュージシャンである大友良英氏は、福島でのプロジェクトをはじめ、即興アンサンブルを数多く実践されている。東京音楽大学では毎週授業があり、即興音楽創作に日常的に取り組んでいる。今回は大友良英氏を迎えて、ハンドサインを用いた即興や即興音楽の成り立ちなどをお話しいただいた。 ハンドサインを用いた合奏は、楽器経験の有無に関わらず、誰もがフラットに参加できる場づくりで成立する。指で数字を示し、提示された回数の音を演奏する方法や、独自のサインを参加者の間で作り出し、演奏に加えていく方法などを教授していただいた。また、学生にも指揮者になる場面を頂き、実際に場をリードする練習を行った。即興音楽では、前に立つリーダーのパーソナリティや雰囲気などが自然に反映され、その人らしさが出るような演奏へとつながった。実際の現場では、成果として発表の場が設けられることが多いが、大友氏は聴き映えする音楽にするコツとして、プロフェッショナルな音楽家を数名仕込んでおいて音楽の支えを担う人を用意しておくなど、より実際的なお話を伺うことができた。参加者や音楽家が一緒に演奏する機会は両者にとって新鮮なことで、お互いに刺激し合うことのできる環境作りの工夫がされていると感じた。講座の後半では、即興音楽に関する本（30ページの写真参照）を紹介していただき、学生にとって有益になる情報を得ることができた。

〈学生のことば〉

・私はピアノが専攻ですが、ミュージカルに出たくて声楽をやりつつ、サウンドクリエーターになりたくて作曲を勉強している、専攻迷子音大生です。現在は、所属しているミュージカルサークルで、楽曲制作を担当しています。音楽は言語というのはいつも私が思っていることでした!! 何年かぶりに、音楽を学んでいない人たちと出会って歌を教える中で、「簡単で相対的なドレミの概念」すらも持っていない人がいることを知り、これは3歳頃までに習得した言語の発音がネイティブになるのと同じように、彼らは恐らく幼少期に音楽と触れ合う機会が人より少なかったのではないかと気付きました。「彼らには音楽がどんな風に聴こえているんだろう」と思っていましたが、先生がペリー来航の話の中で「言葉が通じていない状態の音楽は、お互い雑音のように聴こえた」と仰ったのを聞いて、少しだけわかったように思いました。一本締め、歩くリズム、等々、音楽を勉強していない子たちでもできることはたくさんあると指摘され、教える上でのヒントが沢山得られました。この授業では割と、「正解に囚われず、自由に」といった内容が多いですが、大友先生のお話はその中でも、「この正解に辿り着くのは一見難しいように思えて、実は誰でもできること、誰でも持っている感覚の延長線上にある」ということが明確に示されていて、音楽の楽しさや感覚を上手く伝えるためのヒントが沢山あり、本当に興味深かったです。

（東京 / ピアノ /3年）

2021年度　第13回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第13回ミュージック・コミュニケーション講座 「即興はこわくない！ ～色々な音楽的手法と自由なアイディアで、モチーフを膨らませてみよう～」
講　師	渚 智佳（ピアニスト）
実施日時	2021年10月22日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoomで神戸に同時配信)
講座の概要	ピアニストで東京音楽大学講師の渚智佳氏による即興演奏をテーマとした講義は、講師による実演が多く取り入れられた内容であった。クラシック音楽を学ぶなかで即興演奏に苦手意識をもつ学生に対し、日頃から気軽に即興に触れてもらえるよう、段階的に即興演奏に関する考え方やスキルが紹介された。 冒頭にウォーミングアップとして、学生が選んだ好きな調（F-dur）をもとに、渚氏が3和音のアレンジを中心とした即興演奏を披露した。次に、神戸女学院の学生から好きな調で2小節のメロディー（F-dur）を提示してもらい、続けて東京音大の学生から提示された2小節のメロディー（e-moll）をつなげた4小節のメロディーをもとに、渚氏が6分程度の曲を即興で演奏した。即興とは思えない曲の構成と完成度に学生は圧倒された様子だったが、演奏後にどのように考えながら即興を行ったのかを分かりやすく解説してもらった。2名の学生から提示されたメロディーを分析し、どのような和音を付けるとよいかを考え、その和音の構成音をもとに即興演奏を発展させていく、という基本的な手順を述べた上で、和音の付け方には様々な可能性があり、無限に即興を発展させられる旨も言い添えられた。 続いては、学生からランダムに提供してもらった3音「レ・#ソ（♭ラ）・シ」をモチーフにした即興の試みをおこなった。第1ステップとして、3音に和音を付けるという作業を行い、東京、神戸からいろいろなアイデアが出された。3音を含む減七の和音（レ・ファ・#ソ・シ）以外にも、3音と関係性のない音（ミ）を加えた和音などの提案があり、その和音がさらに長三和音へ解決する流れを渚氏が解説すると、学生たちも発展のさせ方が少し解き明かされた様子であった。双方の大学の学生からいろいろなアイデアが出されることにより、能動的に即興の手順を学ぶことができた。さらに最後に応用編として、両校からランダムに出された5音のモチーフに和音とリズムを付けるという試みに挑戦した。 渚氏の「素材がシンプルだと料理の仕方がいろいろある」という言葉が印象的であったが、アレンジの引き出しが多いからこそ、料理のバリエーションが広がることを実感した講義であった。

〈学生のことば〉

・即興演奏は今後の仕事で大きく関わってくる分野なのでとても勉強になりました。特に各大学が出したメロディーから即興されたのが面白かったし、勉強になりました。（東京 / 音楽教育 /4年）

・即興演奏なんて、自分には縁のないことだと思っていたのですが、間違いはないという先生のお言葉があったので、楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございました！

（東京 / ピアノ /4年）

・先生の即興はゼロから作っているのではなく、普段の練習している楽曲からインスピレーションが湧くという言葉が本当にその通りだと思いました。今回授業で扱ったモチーフを自分でも自宅に帰ってやってみましたが、大学に入ってからポップスばかり弾いているので、私のはどうしても劇伴の BGM のようになってしまいました。対照的に先生はクラシカルだったので、そういう点でそれぞれのバックグラウンドが見えるようでとても楽しかったです。（東京 / 作曲 /3 年）

・即興には昔からどうしても苦手意識があり、自分で和音をつけたりするのがすごく苦手だったので、今回の講座は参考になることが多く、すごく楽しんで受講することができました。自分で咄嗟にメロディーを考えたりすることもあまり得意ではなかったので少し戸惑うこともありましたが、先生が、私たちが考えたメロディーをすごく素敵にアレンジしてくださって嬉しかったです。
(神戸 / ピアノ /2 年)

・先生の作曲のセンスが溢れていて、終始圧倒されていた授業でした。単音のメロディーに和音をつけて、さらに長くしていって、元々あったかのような曲をすぐに創り上げていっていたのですごいと思いました。単旋律に対して和音をつけるだけであそこまで違うのかと思いました。
（神戸 / 声楽 /2 年）

・音楽を自分でつくるおもしろさを知ることができました。作曲をするといったような大きいことじゃなくても、メロディーラインになんとなくの伴奏をつけてみるということだけでも自分の中での音楽の価値が変わってくるのではないかと思いました。そのため､和声を考えるのは難しくても、理屈なしに伴奏つけて遊んでみたり、和音というものに触れ合っていきたいと思いました。
（神戸 / 声楽 /2 年）

・即興や耳コピなどは得意ではないですが、できるようになりたいなという気持ちはすごくあるので、少しずつ練習していきたいなと思いました。先生が、和音が大事で和音を元に即興を演奏するとおっしゃっていたので、和声学などで和音の知識を固めて、生かしていきたいなと思いました。
（神戸 / ピアノ / 2 年）

・渚先生の演奏に感銘を受けました。本当にたくさんの引き出しを持っていらっしゃるのだなと思い、自分ももっと引き出しを増やして色々な演奏ができるようになりたいと思いました。
（東京 /MLA/4 年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2021年度　第14回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第14回ミュージック・コミュニケーション講座 「学校で教えてくれない音楽」
講　師	大友 良英（作曲家）
実施日時	2021年11月12日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoomで神戸に同時配信)
講座の概要	作曲家として数多くのテレビ・映画作品の音楽を手がけ、自身もジャズ・ミュージシャンである大友良英氏は、一般参加型の即興アンサンブルのプロジェクトにも力を入れて活動されている。今回は大友氏による「誰でも参加できる音楽」について講義して頂いた。 大友氏はこれまでの活動として、「フェスティバルFUKUSHIMA!」「アンサンブルズ東京」の様子を、映像を交えながら紹介された。この活動ではミュージシャンや一般人延べ300人が各自の楽器を持って野外に集まり、簡単なハンドサインを用いて即興的にアンサンブル演奏をする。このハンドサインはブッチ・モリスの「コンダクション」という技法や、ジョン・ゾーンの即興演奏からヒントを得て生み出した方法で、譜面が読めなくても誰でも演奏に参加出来る方法として考案されたとのこと。 例えば指を1本出したら短い音出す、5本は長い音を出す、指名されたら好きなリズムやメロディを即興的に演奏するなど、シンプルなものである。ハンドサイン示す指揮者はこれらの要素を組み合わせて音楽を発展させていく。発展させていくアイディアは、これまで様々なジャンルの音楽を聞いて、どのような構造でできているか学んできた経験が生かされているとのこと。 大友氏はこのアンサンブル演奏について「単純な音であっても1人で音を出すのと様々な音が集まって大勢で音を出すのとでは迫力が違う。また、出た音に間違いは無いため、演奏技術で差が出ることはない。このような音楽は様々な差別の枠を外すこともできる」と述べられた。 最後に大友氏は「音楽のマルチリンガル」という言葉を用いて、様々な国で色々な音楽のジャンルが生まれている現在、多様なミュージシャンが共存していくためには、自分の知っている音楽以外の価値観で音楽をしている人たちがいることも知っておく必要があると述べ講義を締めくくった。 「誰でも参加できる音楽」「音楽の多様性の尊重」というテーマは現代の社会課題でもある社会的包摂とも繋がり、音楽の可能性を改めて考えさせられた。

〈学生のことば〉

・音楽は苦手な人もいるが、誰もがじゃんけんや一本締めができて、潜在的に音楽をする能力を持っているという話にとても納得しました。誰もが自分の好きな楽器を持って音を鳴らすという動画を見て、好きなように音楽を奏でられるのは、とてもいいことだなと思いました。私は教育者になるかはまだ決まってないのですが、音楽を誰かに教える上で必要な心構えなど、大切なことを学ぶことができて有意義な時間でした。音楽を苦手だと思っている人にも楽しめる音楽を作っていけたら良いなと思いました。　（神戸 / 声楽 /1年）

・大友さんが開催されたフェスティバル福島は、コンダクションというハンドサインのみを用いる即興演奏とのことでしたが、人の前に立って音楽を

演奏するということは苦手な人が多いと思うので、譜面を読めない人、苦手意識を持っている人にも参加しやすい形式ですごく良いなと思いました。指導する立場に立つ場合には、音楽がどのような構造で成り立っているのかを知る必要がありますが、参加する場合には何か音を鳴らすことさえできれば良いというのは敷居が低いので、私もこれから自分が小さい子を指導する立場などに立つときには役立てたいなと思います。

（神戸 / ピアノ /2 年）

・音楽のマルチリンガルになる、という話がとても興味深かったです。福島での演奏の動画はとても衝撃的でした。楽器があまり得意ではなくても、音楽を楽しむことができることはとても本質的であると思いました。また、音楽の授業で生徒が音楽を嫌いにならないようにする必要があることもとても共感しました。先生の本をぜひ読みたいと思います。（東京 /MLA/4 年）

・音楽は思いとか雰囲気とか、あやふやなことが原動力となっているものがほとんどですが、大友先生のお話は感覚的だったことが独特の表現でどんどん言語化されていくので、自分の中で操れるようになる気がします。私はポップスを勉強しており様々なアーティストの作品を聴きますが、ポップスの世界にもジャンルのクロスオーバーが起きているのかなと感じました。むしろポップスという新しいもの好きで、いろんなバックグラウンドを持つアーティストが多いフィールドの方が、ジャンルが入り乱れることを許容する傾向にあるのかなと思いました。（東京 / 作曲 /3 年）

・音楽とは何か、について考えることができました。福島での地震の際に行っていたことなどを知ることができ、勉強になりました。地震でみんなが困っているからこそ、気が滅入りそうになっているからこそ、音楽の力が人々に良い影響を与えていると思いました。（神戸 / 声楽 / 2 年）

※写真は Zoom 配信による講座の様子です。

2021年度　第15回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第15回ミュージック・コミュニケーション講座 総括
実施日時	2021年1月14日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） (Zoomで神戸に同時配信)
講座の概要	1年間のまとめとして、両校で総括を行った。今年度も海外のアーティストを招いての特別セミナーの実施は叶わなかったが、それぞれの大学で、独自の活動ができた年であった。総括では、取り組んだ活動について互いに報告しあった。 東京音大からは、秋学期に取り組んだ、小学生を対象にした音楽ワークショップ企画の一部をデモンストレーションした。既存の曲から離れてより即興的な取り組みにチャレンジする課題が残ったが、日本とは真逆の夏のクリスマスや動物の登場するワークショップなどが並んだ。報告の後半では、一枚の絵画をテーマに、その絵が持つイメージを即興演奏し、どのような作品かを当てるワークを行なった。絵を鑑賞した印象から受ける「時間」「無機質」「溶ける」の三つのキーワードを共有し、グループごとにひとつのキーワードを基に即興演奏を行なった。見事に音楽が持つイメージが共有され、神戸女学院の学生がサルバドール・ダリの『記憶の固執』と答えを言い当て、演奏した東京音大の学生も驚いた。このワークから、美術作品の付加情報や歴史に焦点を置くのではなく、作品そのものの素材に目を向けて、深く味わっていく視点から、音楽と美術の枠組みを超えた、ワークショップの新たな可能性を感じることができた。 神戸女学院では、10月1日と8日に行われた、東瑛子氏によるワークショップについて発表を行った。受講生たちのほとんどは音楽ワークショップが初体験であり、それぞれがワークショップの動画を用いながら、アイスブレイクの様子や小物楽器を用いた即興演奏の新鮮さや面白さについて伝えていた。また、即興演奏のリーディング（指揮者）体験については、「即興を行うなかで、どうすれば面白くなるか、どうすれば良いものになるかを考えることに加え、指示を明確に相手に伝えることの難しさを実感した。それは、リーディングのときだけでなく、普段から相手に自分の意思を明確に伝えることの難しさと同じことであると思った。」と述べていた。

〈学生のことば〉

・1年を通して実践が多く、考えたり、グループでの発表準備など自分主体で動くことを学べる良い機会だった。音楽初心者に対して何ができるのか、また、どのような可能性があるのかこの授業で視野が広がったように感じる。

(東京 / 音楽教育 /4年)

・純粋に音楽を楽しむことを女学院と東京音大の皆さんと共有することができて、とても有意義な時間でした。色々な人と音楽で繋がっていきたいと感じたし、もっともっと音楽を楽しみ、より良い音楽を演奏できる演奏家になりたいという思いが強まりました。MC講座では色々なお話を聞いたり、ワークショップを体験したりしましたが、今までと違う視点でものを見たり考えたりするきっかけとなったお話も多かったし、今まで疑問に思っていたことが言語化され、自分なりに理解できたこともあって、あらゆる意味でよかったと思いました。

（神戸 / 声楽 /1年）

おわりに

2009 年にスタートした３大学の共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、文部科学省の「戦略的大学連携支援プログラム」採択による補助期間を終えた後も歩みを止めずに、2015 年度からは東京音楽大学と神戸女学院大学音楽学部との２校で継続してきました。年度末に両校で協力して作成する報告書も 13 冊目となりました。

一昨年来、新型コロナ・ウイルスの影響で多くの舞台がキャンセルとなり、対面授業もままならない時期が続きました。こうした状況を踏まえ、２大学の共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」では、昨年度に引き続いて「分断の時代を音楽で乗り越えるには（パート２）」を今年度の全体テーマに掲げて、多彩な講師陣と共に、今後の音楽の可能性を考える講座を展開してきました。各講師の発する現状認識と困難を乗り越えるための視点やスキル、それに対する学生たちの気づきや学びの様子を、本報告書に収めました。

この１年間の活動をここにご報告申し上げると共に、本プロジェクトにご協力いただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。

なお、私事ながら、2000 年春から奉職した神戸女学院大学をこの３月末で定年退職いたします。退職後も名誉教授として本プロジェクトを継続していく所存です。これまでのご厚情に感謝申し上げると共に、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

2022(令和４) 年 ３月

津上智実 (神戸女学院大学音楽学部・教授)

共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2021 年度　活動報告書

2022 年 3 月発行

発行者　東京音楽大学　連携センター
〒 171-8540　東京都豊島区南池袋 3-4-5　B1005
Tel/Fax：03-3982-3227
Mail：music.communication.tcm@gmail.com

編　集　神戸女学院大学音楽学部　連携ルーム
東京音楽大学　連携センター

表紙・本文デザイン　上條浩史